知事対談

多様な存在を受け入れる「情緒」という感性

～文明世界の袋小路に挑戦する日本の「総合」人類学とは～

文明開化でヨーロッパの科学技術を取り入れた近代日本は、「物理学至上」のあり方に疑いを入れなかった。しかし、科学技術が主導する文明は今袋小路に差し掛かり、新しい問題解決のための方法を模索している。大きな認識の転換が必要とされる現在、必要なのは日本人が古くから育んできた多様性を尊重する情緒ではないか。川勝平太・静岡県知事と尾本恵市・東京大学名誉教授が、洋の東西、自然と文化、理系と文系、ヒトと霊長類……あらゆる境界を往来しつつ語り合った。

「物理学から人類学へ」で現代文明を見直す

知事　尾本先生は1960年代に分子人類学をいち早く日本に持ち込まれましたが、最近は科学技術至上主義の文明を見直すために、「物理学から人類学へ」と提言されています。そのあたりからうかがわせてください。

尾本氏　まるでドン・キホーテの戦いですが、人間のメンタリティを示す型が、二つの学問に集約されていると考えています。物理学は「狭く深く」線的に追究していくので、法則や専門家をつくりやすい。一方、人類学者は「浅く広く」を求めます。離散的で次々に連想を広げるため、ジェネラリストを志向し、「複雑なものほど美しい」と考えます。

知事　連想や比喩で類推を重ねていくと世界が広がり、多様性の認識につながります。先生の方法は「蝶博士」の異名をもつほどの蝶の採集と関係がありそうですね。

尾本氏　昆虫との原体験は、学齢前の5歳頃、家の前の塀に止まったルリタテハと出くわしたことです。これほど美しいものがあるのかと驚いた。80年後の今でも、心は「昆虫少年」です。

知事　坪井正五郎は東大人類学の創始者ですが、江戸期の本草学や博物学の系譜を引き継ぐ学者だと承知しています。

尾本氏　はい。創始者が博物学の愛好者だったため、人類学教室には文・理を分かたない総合学を旨とする気風がありました。物理学的な見方では、博物学は「学問ではなく趣味」と言われますが、芸術と結びつきすぐれた自然描写を生みます。円山応挙が描いた「写生帖」の蝶など、「これはカラスアゲハ」などと同定でき、図譜と遜色がないレベルです。

知事　江戸期の博物学の特徴は、精緻な観察と、標本などの芸術的表現です。そこには生き物をいとおしむ日本的な自然観がありますね。

尾本氏　生きとし生けるものは多様であり、皆同じように大切だという観念は、縄文人のDNAに由来するかもしれません。日本では、そのような考えの上に学問や美術ができているような気がします。

知事　自然界に霊性を感じるのはアニミズムですが、縄文時代のアニミズムは伝来した高等宗教の仏教理論で磨かれました。梅原猛さんは、アニミズムが仏教の天台本覚論の「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）」に結実したと言われています。生きとし生けるものはことごとく「嘉（よみ）されている」という思想です。

尾本氏　それは人類学的にも興味深い考えです。人間至上主義でない点がいい。

知事　江戸期の博物学は、アニミズムを土台にした、天台本覚論に発する学問の集大成ではないか。

「情緒」で、日本の学問をパワーアップできればすばらしい。

知事　東大では戦前に坪井正五郎が活躍しましたが、京大では戦後に今西錦司が霊長類学を立ち上げました。今西さんは若い頃に渓流のカゲロウの生態を研究された。昆虫観察です。

尾本氏　「棲み分け」理論ですね。

知事　カゲロウは孵化すると三日間空中を乱舞し、その間一滴の水も口にしないそうで、儚さの象徴ですが、生活環境に応じて棲息している。その観察から「棲み分け」理論を編み出して、自然淘汰・適者生存のダーウィン進化論に異を唱えられた。

尾本氏　今西さんはカゲロウによって他の生物をも「相対化」しました。相対化は私が重視する方法です。現代人（ヒト）だけ見つめていても人類のことはわからない。「鏡」になる存在が必要です。霊長類学は、その点をうまく使っています。

知事　京大の松沢哲郎さんはチンパンジーの「アイちゃん」を人間のように扱う。高崎山のサルの研究で有名な伊谷純一郎さんはニホンザルにいちいち名前をつけた。

尾本氏　個体識別ですね。単なる番号でなく名前をつけるのが日本的で、とても大事な方法だと思います。

知事　有名な幸島のサルの「芋洗い」も一頭ごとの個性を長期観察していた中で発見できた。サルの個性とサル社会の文化を認め、サルを擬人化する日本人の方法が世界クラスの霊長類学を生んだ。日本人は、縄文以来、大陸から流れつく文化や人々を差別せずに受け入れていくうちに全体を包摂する心性を育んだのではないかと思います。

尾本氏　なるほど。日文研（国際日本文化研究センター）にいた頃の外国人教授との対話を思い出しました。日本人は皆ミンミンゼミやツクツクボウシ、ヒグラシなどの鳴き声を聞き分けて、歌や俳句にする。「日本文化をよく表すのはセミの声だ」と言ったところ、彼は「セミの鳴き声なんて単なるノイズだ」と言うのです。

知事　紀貫之が、水に住む蛙（かわず）も花に鳴く鶯も、「いづれか歌を詠まざりける」と言っていますが、自然と一体化しながら、生物を愛でていますね。

尾本氏　まさに日本の情緒ですね。京大の山極壽一総長との対談で、自然人類学と文化人類学が分裂したため日本の人類学は本来の力を発揮できないと話し合いました。二つを統合して外国の真似でない日本オリジナルな総合科学にしたいが、キーワードは「情緒」だろうという展望を得ました。

知事　情緒を重んじるのは、冒頭で言われたように、物理学の冷たい論理よりも、連想・類推・比喩などの方法が関係しているように思います。今西錦司は「類推の合理化こそ新しい生物学の生命」だと言い、湯川秀樹の中間子理論の着想は中庸を重んじる東洋思想からの類推らしい。

尾本氏　小柴昌俊さんが、ノーベル物理学賞を授賞されたときいいことを言われました。「仮にアインシュタインがいなかったとしても、いずれは誰かが相対性理論を発表するだろう。しかし、モーツァルトは二度と出てこない。」アインシュタインに代表される科学は、再現性や実証性により理解される。ところがモーツァルトの芸術にある感性や美学は、人間の多様性の一部であり、一回きりの特別な存在です。線形と離散的という思考の違いも、そこにあると思います。

「DNAから人権まで」尾本人類学50年の歩み

知事　先生はアイヌの起源の研

東京大学名誉教授　尾本（おもと）恵市（けいいち）氏

静岡県知事　川勝（かわかつ）平太（へいた）

多様な存在を受け入れる「情緒」という感性

～文明世界の袋小路に挑戦する日本の「総合」人類学とは～

究から出発され、フィリピンの狩猟採集民であるネグリトの研究では世界的な成果を挙げられました。それは相対化の「原点」というか「鏡」になる存在を求められてのことでしょうか。

尾本氏　その通りです。アイヌ研究は1960年代に集団遺伝学の理論を日本の人類学に持ち込むきっかけになりました。私の学生時代には、まだ人種の研究がまかりとおっていて、教科書にロシアの文豪トルストイの写真と共に「アイヌは白人である」と書かれていました。根拠はトルストイと顔が似ているという一点です。私はこれを正さないと人類学に未来はないと思い、ドイツに留学してタンパク質の遺伝的多型（個人差）を研究したのです。

知事　形態人類学一辺倒だった学風に挑戦されたわけですね。当時はまだゲノム解析の方法は…。

尾本氏　ゲノムどころか、東大にさえDNAシーケンサーもコンピュータもなかった時代です（笑）。新しい集団遺伝学の多変量解析を手計算で行うのは限界があり、学園紛争の激化にも悩まされました。折よく招聘されたオーストラリア国立大学（ANU）で大型コンピュータを用いて諸民族の分子系統樹を描き、アイヌはヨーロッパ人ではなく、本州の日本人と遺伝的に極めて近いことを実証できました。調査過程でアイヌの人たちと交流し、東大に提出した学位論文の献辞には「アイヌの被験者へ感謝を込めて」と書きました。

知事　被験者への献辞などは、尾本人類学が「DNAから人権まで」と評価される所以ですね。先生のアイヌ白人説否定は日本人の起源に関わる大きな功績です。それから半世紀、ヒトゲノム解析が進み、人類の起源の謎を解き明かす学問として分子人類学は注目の的です。静岡県には国立遺伝学研究所があり、先生の教え子の斎藤成也さんの活躍はめざましいですね。

尾本氏　優秀な学生のなかでも彼はずば抜けていて、私は授業中の彼の質問に備えて対策を練ったほどです（笑）。

知事　思いがけない質問が浮かぶのも離散的・連想的な人類学の発想の成果でしょうか。斎藤さんは仏教の造詣も深い。尾本先生は、「ヒトは何者か」という大問題に対して、先史学、進化学、民族学さらに脳や成長の研究、文化・文明論まで援用して、ヒトの特徴を網羅的に説明されています。

尾本氏　それも「浅く広く」ですね。文明の位置付けは、まずヒトの進化（遺伝子の進化）を地球史の中でとらえ、それから遺伝によらない「文化」およびその究極の形である「文明」に着目する。

ヨーロッパ流では解決不能な難問に人類学の方法を生かす

知事　生物種のなかで、文化の特殊な発展形態である文明を生み出したのはヒトだけです。農業革命や牧畜革命で人口が増大し、地球大に拡散し、近代文明人は先住・狩猟採集民を差別・支配するようになった。尾本人類学では狩猟採集民こそヒトの原点の「生き証人」で、狩猟採集民ネグリトの行動や生活を「鏡」として現代文明を見るべきだという問題提起をされています。先生にとって「先住民族の人権」は重要な柱ですね。

尾本氏　深い理解をいただき、ありがとうございます。私の場合、人権についても7～8歳頃に原体験がありました。わが家の「お手伝いさん」が私の家族と食事を共にせず、おかずの内容も違うことを不公平と感じ、母に抗議したのです。昆虫の世界にそんなことはない。色や形は違っていても、アゲハチョウだからえらいということはない。なぜ人間は違うのだろうと疑問を感じました。

知事　虫の世界での優劣のなさを人間世界に当てはめられたのは、やはり類推や連想による発想ですね。「文明人」も狩猟採集民もどちらも同じ人権を持つという認識とも通底します。

尾本氏　子どもの正義感は本能の一部だと思います。昔から「親の背を見て育つ」と言われる通りで、親の「うそ」を子供は敏感に感じ取ります。教育以前の問題でしょう。

知事　どんな人もかけがえのない存在で、〝irreplaceable（かけがえがない）〟、〝replace（とりかえ）〟できないという意味で平等です。自然界の本質である「多様で平等」をヒトはわきまえるべきですね。

尾本氏　その通りです。たとえば狩猟採集民の平等主義は食事にも表れます。彼らは常に「共食」で、決して一人では食べない。ネグリトの人たちにインタビューしたとき、日本の子どもたちの「孤食」の話をしたところ、「そんなばかな、一人で食事などありえない」と笑われました。彼らは獲物の多少にかかわらず、老若男女等分して食べます。

　また、同化政策のもと、貧困を余儀なくされたアイヌの人たちは、苦しい暮しの中でも他人を思いやり、分かち合う心を忘れませんでした。狩猟採集民の他者への共感は、農耕・牧畜民になるとなくなり、差別が生じます。共有物だった土地の私有化によって、富と権力が私物化されたためです。

知事　差別がなぜ許されないのかを学問的・実証的に裏付けるのは重要です。学問的裏付けこそ差別解消に向けた最善の方法だと思います。多様で平等で寛容な社会は「ふじのくに」づくりの基本方針そのものです。

尾本氏　昨年、私どもは「自己規制する文明は可能か？」というシンポジウムを開きました。前田泰弘さん（経済産業省・当時）、谷口正次さん（環境・資源ジャーナリスト）と一緒です。私が紹介した「自己規制する文明」は、1963年に英国の進化生物学者ジュリアン・ハクスリーが提唱した概念です。彼は進化を大きく4段階ととらえ、「宇宙の進化」「生物の進化」「人類の進化」の後に「自己規制する進化」があり得ると言いました。

　成長・発展一辺倒の文明を一度立ち止まって考える「産業革命」（前田）や「欲望を野放しにする文明からの脱却」（谷口）について論じられました。

知事　ヨーロッパに産業革命をもたらした技術は科学の応用ですが、科学が立脚する帰納法・演繹法は世界認識の一つの方法でしかありません。科学技術に支えられた文明は地球環境を破壊し、袋小路に差し掛かっています。世界をあるがままに全体として網羅的広がりでとらえる人類学の方法は、連想と類推を駆使するところは独自で、非常に重要だと感じます。

　今後も健康に留意されて、日本発の総合人類学の時代をつくりあげていただきたく思います。ありがとうございました。

東京大学名誉教授　尾本 恵市氏

1933年東京生まれ。人類学・人類遺伝学者。東京大学、同大学院を経て、ミュンヘン大学と東京大学で博士号取得。東京大学教授、国際日本文化研究センター教授、総合研究大学院大学シニア研究員などを歴任。

静岡県知事　川勝 平太

1948年生まれ。早稲田大、同大学院を経て英オックスフォード大で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。